

19世紀フランスにおけるベルギー移民と差異の所在

著者	平野 奈津恵
学位授与年月日	2015-07-23
URL	http://doi.org/10.15083/00072920

論文の内容の要旨

論文題目 19 世紀フランスにおけるベルギー移民と差異の所在

氏名 平野奈津恵

本論文は、19 世紀北フランスの炭鉱都市に労働と生活の場を見出だしたベルギー移民と、共に暮らしていたフランス人との関係について考察したものである。かれら炭鉱都市の住民たちは、何に喜び、何に怒り、いかなる結びつきをもっていたのか。そして、ひとたび国境をこえる移動が社会的緊張を生み出したとき、かれらはいかにして折合いをつけたのか。19 世紀フランスにおけるベルギー移民の歴史を、そこに生きた人びとの視座から捉えなおすことをめざした。

19 世紀以降、フランスでは出生率の低迷などによる労働力の不足を解消するために、国外からの移民を受入れてきた。ベルギー移民は、19 世紀を通じてフランスに流入した外国人の大多数を占めていたにもかかわらず、今日の移民史研究において、その記述量が極端に少ないことに驚かされる。ベルギー人は、地理的にも文化的にもフランス人と距離が近く、「移民」とはみなされてこなかったことが、この研究の欠落を生んだひとつの理由として考えられる。こうした見解は決して誤りではないが、19 世紀末にはベルギー移民を標的とした排斥事件が起きていたという事実も、見過ごすことはできない。一見すると、ベルギー移民とフランス人との間には何ら違いはなく同質であるかに見えるが、両者はいかに互いを認識していたのであろうか、はたして何らかの差異が意識されていたのであろうか。本論文では、差異の所在を指標としながら、かれらの関係について考察した。

本論文は二部から構成される。第一部では、炭鉱都市の「日常」に視点をおき、都市空間のあり方や生活の実態を具体的に明らかにしながら、そこで暮らしたベルギー移民とフランス人住民の間にはいかなる差異が見いだされるのか検討した。そして第二部では、

炭鉱都市の「非日常」として、1892年8月に北フランス最大の炭鉱都市であるランス市(Lens)とその周辺で発生した「ベルギー移民排斥事件」をとりあげ、当事者たちの行動や態度を具体的に明らかにしながら、フランス人住民とベルギー移民の間にいかなる感情が渦巻いていたのか読み解いた。

第一部一章「炭鉱都市の住民」では、国勢調査原簿を史料として用いながら、北フランスの炭鉱都市の形成と発展を、そこに暮らした住民たちの人口動態から跡づけた。第二章「炭鉱都市の生活」では、炭鉱都市はどのような理念のもとに建設されたのか、また、実際そこで住民たちはどのような生活を営んでいたのか、計画者と生活者、双方の視座から都市・社会空間を検証することで、炭鉱都市とはいかなる世界であったのか、考察をこころみた。そして第三章「労働者と移民をとりまく法制度」では、19世紀にフランスで整備された法規類を参照しながら、これらの法制度が炭鉱都市の住民たちの実際の生活と意識にどのような影響をおよぼしたのか、検討を加えた。

19世紀半ばより、北フランスの炭鉱地帯には労働者都市と呼ばれる、炭鉱会社により計画的に建設された都市が田園地帯のただ中に忽然と出現し、フランス国内からだけでなく、国境を越えたベルギーからも、多くの人びとが労働と生活の場ともとめて移住してきていた。これらの新興都市へと流入したフランス人とベルギー人の移動は、それぞれ国内移動と国家間移動とに分類されるが、実はその多くがベルギー=フランスを東西に横切るひとつらなりの炭鉱地帯内における人の移動にすぎず、住民たちは同じ方言を話し、同じ炭鉱にまつわる独自の文化や生活リズムを共有していた。とりわけ、北フランスの労働者都市は、炭鉱労働者とその家族のみからなるきわめて同質性の高い空間であり、住民たちの間では緊密な結びつきが築かれていた。ベルギー人であれ、フランス人であれ、これは同じであった。ところが、1880年代より、フランスでは労働法や社会保障制度、徴兵法や国籍法の整備・改正が相次ぐなかで、いくつかの法制度は、国民と外国人を差異化する方向性を有していたことが指摘された。ただ、炭鉱都市の住民たちが、これらの差異について、実際にどのような感情を抱いていたかについては、第一部では判断できず、第二部に持ち越された。

第二部「ベルギー移民排斥事件」では、事件という非日常の出来事のなかから、日常生活では表面に出てくることのない、住民たちのこころの内をあぶりだすことを課題とした。第四章「現地住民による事件」では、事件の当事者である炭鉱都市のフランス人住民に焦点を絞り、行政・司法文書史料のなかから、かれらの行動と態度を掬いとり、そこに体现されたかれらの心理を理解しようこころみた。第五章「帰還者が証言する事件」では、事件のもう一方の当事者であるベルギー移民に着目し、当時ベルギー政府が実施した聞き取り調査を史料として用いながら、事件をきっかけにベルギーへと帰還した人びとの実態について分析した。第六章「外部から見た事件」では、炭鉱都市を一旦離れ、ベルギーとフランスにおいて、事件が当時どのように報道されていたのか、また、事件の当事者たちにいかなるまなざしが向けられていたのか、両国の新聞記事から検証した。そして第七章「ベルギー移民のもうひとつの選択をめぐって」では、再び炭鉱都市に視点を戻し、事件のさなかにフランスへの帰化を申請した人びとについて、かれらの帰化申請書類を史

料として用いながら、どのような人物がベルギー国籍を捨てフランス国籍を取得することを選択したのかを分析した。また、炭鉱都市のフランス人住民たちは、このベルギー人による帰化の動きをどのように受け止めていたのかについても検討した。

19世紀末にフランス各地で発生した移民排斥事件を分析した従来の研究では、フランス人労働者が外国人労働者に暴力の矛先を向けたのは、外国人よりも優位に立とうとする行為——フランス人が外国人との間に差異を生み出そうとした行為——であると捉えられてきた。だが、本論文が分析対象とした北フランス炭鉱都市の事例からは、それとはまったく逆に、フランス人住民たちはベルギー移民との差異を否定し、皆が同質であろうと指向していたのだと理解された。また、1892年の出来事は一般に、フランス人がベルギー移民に暴力を振るうという構図から、「移民排斥事件」として捉えられてきたが、それはひとつの側面にすぎず、この事件には炭鉱都市住民たちのさまざまな思い——炭鉱会社に対する抗議や公権力に対する抵抗という社会運動としての側面や、祝祭的な要素、あるいは単なる憂さ晴らしとしての性格もあった——が託されていたことも確認された。

19世紀北フランスの炭鉱都市は、ベルギー=フランスを横切る石炭鉱脈地帯内を人びとが移動することで、驚異的な発展をとげた。日常生活を営む上で、当初、炭鉱都市のフランス人とベルギー移民の間では、差異は知覚されずにいた。だが、世紀転換期にかけて、両者の差異が、とりわけ国境を越えることで生みだされる差異が、少しずつ露見しはじめることとなった。1892年の「ベルギー移民排斥事件」は、炭鉱都市の住民たちがこの差異をいち早く直感的に感じ取り、日ごろの行動様式にのっとり、補正をこころみただと理解される。「事件」をきっかけとして、炭鉱都市ではベルギー人の帰還と帰化——排除と包摂——がうながされ、また新たな、ベルギーからの人の移動を呼び起こした。「事件」は、炭鉱都市の住民相互の関係性に再考をうながし、また新たな、人と人の結びつきが生まれる契機をも孕んでいた。それはつまり、「われわれ」と「かれら」の境界は固定されたものではなく、人びとが移動することで、また新たな境界が創られてゆくことを意味しているのだとも指摘されよう。